

いじめと文化的心性との交点¹

一言英文 (関西学院大学)²

The intersection of bullying and cultural mindset

Hidefumi Hitokoto (*Kwansei Gakuin University*)

(2015年4月18日受稿, 2015年6月28日受理)

I propose a cultural psychological explication to the problem of power abuse, such as school bullying. The cultural context of interdependence, which fosters sensitivity to rejection, potentiates lowered social identity with friends, encourages to be ordinary among others and cause relational concern can be a background to the indirect, obscured, and collective type of bullying in Japan. Although universal approach to the abuse of power is proven effective, understanding the nuanced, seemingly subtle shared meanings shared among the cultural members on well-being and power may also be used to understand the big picture of this long-lasting classroom problem.

Key words: cultural happiness, bullying

1. 序論

いじめは、社会的勢力の乱用であり (Smith & Sharp, 1994), 関係のある集団内の他者に対して行われる, 社会的勢力の違いを利用した不当な行為である。いじめに対するこの捉え方は、いじめが必ずしも教室に限られた現象ではなく、職場や組織、友人集団内でも起こりうる普遍性の高い現象であることを意味している。本稿では、このように捉えたいじめの普遍的な側面と、それを取り巻く集団や社会的勢力のあり方を規定する文化的文脈要因について、日本文化に焦点を当てた論考を展開する³。なお、本論考における文化とは、社会集団に共有される価値観や、それと対応する制度や人間関係、自己のあり方といった集合

的な思考様式、感情、行為の循環を指す (Markus & Conner, 2014)。

日本の教室におけるいじめの特徴を、欧州諸国との比較調査から実証的に検討した Kanetsuna, Smith, & Morita (2006) によれば、日本では集団による関係性攻撃が使われることが多い。つまり、教室の大勢で無視したり、仲間外れにするなどの関係性攻撃がいじめだと捉えられていることが日本の教室のいじめの特徴である。また、いじめ被害者は、いじめられたことに対してしばしば自らの落ち度を反省したり、いじめの事実そのものを否定する傾向が見られる。これらを敷衍すると、日本のいじめの特徴として“見えないこと”、すなわち、いじめがいじめ関係者以外の者に可視化されにくいという点が浮かび上がる。いじめ被害者の自殺報道では、しばしば担任がいじめの事実を知らなかったことが取り上げられるが、それはあながち担任の監督不行き届きのみに帰属できることではないのかもしれない。また、見えないことで、日本のいじめは悪化している部分があるとも考えられる。

それでは、なぜ日本のいじめは見えないのか⁴。そこには、日本文化で長く、暗黙のうちに共有されてき

Correspondence concerning this article should be sent to: Hidefumi Hitokoto, 1-155 Uegaharaichibancho, Noshinomiya, Hyogo 662-8501, Japan (e-mail: hideckn@gmail.com)

¹ 本稿は第22回大会シンポジウム1“いじめと文化”で口頭発表したものに基づいている。

² 現所属、京都大学こころの未来研究センター 研究員

³ 本稿で展開する論考はあくまで仮説であり、結論には実証的データによる裏付けが不可欠である。そもそも文化的文脈に注目することの各現場における有効性については別途検討されなければならない。また、本稿はいじめが日本で量的に多いと論ずるものではない。社会的勢力の乱用は普遍的に存在する。本稿は、それが日本文化で立ち現れる様について質的に論じることを目的とする。

⁴ このメカニズムを説明することは直接それを解決することと同義ではないが、冒頭で示したように、もしいじめが教室以外の集団でも生じるとすれば、むしろ教室での対処のみでは、この問題の社会的な根絶にはならないと考える。

た人間関係の維持の仕方、および、規範的な対人行動の特徴が関わっている可能性を考えてもよいだろう。本稿では以下に、これら文化文脈のないじめを取り巻く要因として、1) 拒絶に対する敏感性、2) 日常に潜在する疎外、3) “ふつう”の重要性と、4) 関係懸念の強さ、といった文化的心性について取り上げる。また、これらを前提条件とした社会的勢力の乱用が、日本社会でどのような社会的問題を孕む危険性があるかについて論ずる。

2. いじめを取り巻く文化的心性

文化的文脈は、その文脈下のみで暮らす人間の目には認識することができない。それは、文化が、社会の成員の大多数にとって当たり前とされる暗黙の規範や価値観そのものを構成しているためである。文化の文脈下にある個人は、その規範や価値観に沿った、あるいは沿わないという個人差を持ちながらも、日々他者との交流で自己や他者、ものごとの意味を共有し、その影響下で生活している (Kitayama, Park, Sevincer, Karasawa, & Uskul, 2009)。

日本の文化的文脈では、関係性の中に埋め込まれた自己観と、それを基盤にした他者との関係性を所与のものとした日常生活が実践されている。それゆえ、所属集団との関係性を維持することは自己を維持することと意味的な重なりが多く、一見関係性とは無関係な個人の幸福感ですらも、日本では自他の調和状態と類似した意味で捉えられている (Kitayama, Markus, & Kurokawa, 2000)。

自他の関係性を良好なものに維持するためには、上記の文化的文脈を考慮したものごとの捉え方、感じ方、社会的行動を効率的に行う必要がある。特に日本の場合、身近な集団内において他者の期待に応えたり、他者の評価を裏切らないよう自己の行動を調整することが、結果として社会的な自己実現の大きな要因になる⁵。ゆえに、日本文化に社会化する過程では、このような協調性を獲得し、それを、同様に協調的な人間観を抱く者が多い周囲の他者の間で実践し、良好な社会的結果を経験していくことが伴う。

このような協調性の獲得過程で、身近な関係にある他者から自己が排除されることがあるならば、それは

非常に心理的苦痛を伴う経験となって然りである。発達過程で文化的文脈に適した社会的スキルを獲得する過程は複雑で個人差を伴うものであり、特に、より多くの他者との新しい友人関係や目的志向的な集団活動を行う必要性が高まる義務教育の期間などは人によっては未熟な対人的スキルのみで自他の関係性を維持する必要がある。関係性を維持するという文化的課題がある場合、他者から排除されることは社会的に実現すべき自己と現在の自己との間に大きな乖離を生み出すことであろう。

他者から拒絶されることの日常的な先行刺激の一つとして、他者の笑顔消失がある。一般的に、関係性を良好なものとするためには人は他者に笑顔を見せて受け入れを示すが、関係性の維持を規範とする文化での対人コミュニケーション場面では、社交辞令として笑顔を示すことや、否定的な表情を抑制して他者を不快にさせないことは重要である。それゆえ、普段の身近な対人関係で他者の笑顔が消失するような事態は、明確な怒りや嫌悪を向けられるのとは物理的には異なるものの、決して心理的に肯定的とはいえない。まして、それが自分に向けられた笑顔消失である場合、それは協調性の維持という文化的な命題から反れた事態として、自己の危機として大きな情報価を持つだろう。Ishii, Miyamoto, Niedenthal, & Mayama (2011)の研究では、学生を対象に、強い笑顔の表出から中性的な表情に向かって表情が変化するモーフィング動画を作成し、日本人と欧州系アメリカ人の学生に、いつ笑顔が消えたと思うか認知判断を行わせた。その結果、日本人学生が欧州系アメリカ人学生より早くこの判断を行った。これは笑顔消失に対する敏感性、あるいは関係性からの拒絶に対する敏感性の現れであると考えられ、いかに笑顔消失が日本人学生にとって情報価があるかが理解できる。

拒絶に対する敏感性は、具体的に日本文化の日常生活のどのような側面によって維持されているのか。一つの可能性として、日常で出会う頻度の多い社会的状況が要因となっている可能性が考えられる。日常生活では人それぞれ様々な出来事と遭遇するが、文化的文脈が多くの人によって形成されている以上、その出来事のレパートリーには、社会的な出来事を中心に文化的文脈の影響が現れている (Morling, Kitayama, & Miyamoto, 2002)。Kashima & Hitokoto (2009)では、社会的アイデンティティが社会的状況によって維持されている可能性を検討するため、日豪学生を対象に日常生活で出会う社会的状況と他者に受け入れられている、もしくは受け入れられていないと感じる程度を収集した。

具体的には、まず予備調査として日豪学生から友人集団に受け入れられていると感じる (社会的アイデンティティが高まる) 肯定的な状況と、そうでない (社

⁵ もちろん、日本以外の文化でも他者との協調は必要である。日本では、その維持の仕方として他者の期待を明確な発言を伴わずに慮り、忖度し、先読みし、実際にそうでなかったとしても他者に負担がかかったであろうことを認めてこれを心理的な根拠として対人関係を維持し、これらを規範として維持しようとする。これは特に社会で公式とされる状況 (例: 就職活動や結婚式) や、公式な集団活動 (例: 職場集団や義務教育) において強い文脈要因となって個人の行動を左右している。これに対し、例えば同様に巨視的に集団主義とされるラテン・アメリカ文化では、より積極的、開放的な協調性が維持されている可能性も指摘されている (Ruby, Falk, Heine, Villa, & Silberstein, 2012)。

会的アイデンティティが低まる) 否定的な状況を収集した。続く本調査では予備調査から整理された代表的な状況を項目として呈示し、新しい日豪学生を対象に、状況のそれぞれについて、それが起きた場合どの程度友人集団との間に対して社会的アイデンティティが高まる、もしくは低まるかを評定させた。

状況の産出国と調査参加者の国籍を要因とし、社会的アイデンティティを説明する分散分析を行ったところ、日本産の否定的状況は、参加者の国籍にかかわらず社会的アイデンティティを低めることが明らかになった。すなわち、日本人学生の友人との日常生活には、友人らに対する社会的アイデンティティ(項目: “私は自分がこのグループの一部だと思う” “私はこのグループにいて嬉しい” “私はこのグループに強い結びつきを感じる”)を強く低める効果のある状況が遍在している可能性がある。

このことは、一見すると協調的な文化的文脈とは反対した社会的状況であるようにも思える。しかし、拒絶に対する敏感性と合わせると、実はこのような日常生活こそが強力な協調性を生み出す要因となっていると考えられる。というのは、日本文化では、多くの人々がそれぞれの所属する関係性から離脱することも稀であるため、身近な他者から疎外された場合、その疎外の後に新しい関係を構築することが難しく、結果として疎外のもたらす否定的な結果は非常に大きいものとなる。このことを、繰り返す日常で学習した日本人は、次第に関係から拒絶されることを未然に防ごうとする。仮に拒絶が生じた場合、まず自分が悪かったのかと反省したり、あるいは、拒絶はなかったものとして事実を否定したりする。また、明らかに他者が一方的に自分を排除したとしても、関係性や関係にある他者に問題があると考えことは好ましくないとされ、公にこれを問いただすことはない。いずれにせよ、自己反省や葛藤回避を未然に行い、拒絶に敏感である人々が多く存在することで、逆説的ではあるが排除の危険と隣り合わせであるというまさにそのことによって現在の関係がより保守的、長期的、安定的に維持されるのかもしれない。

排除と隣合わせの状況で排除を懸念するということは、具体的にどのようにその文脈で暮らせばよいのか。このような文脈において、第一に避けられるべきことはおそらく個人的であること(Takemura, 2014)である。個性的な人、すなわち、他の人間と違う点を持つ個人とは、その点を無数の選択肢の中から付き合う相手として好んで選ぶ相手が必要とする。個性的であることを求めることは、このように多くの相手とそもそも出会う機会がある環境下で、付き合う相手を比較的自由に換えられるような状況で初めて最大限にその長所が活きる。一方で、保守的、長期的、安定的な対人関係において、ある程度個性的であろうとするに

は、その個性に従って自由に振る舞うことを集団内の他者が容認していなければならない。この文脈での第一義は調和の達成であり、それが壊れるか否かが本質的に重要であるためである。おそらく通常の場合は、個性的であることよりも、周囲と同じ、すなわち、“ふつう”であることの方がより社会的な自己実現に沿っている。

もちろん、どここの文化でも社会的に普通の状態はあり得る。例えば、個人主義的な文化における普通の状態は、自分が他者とは違う側面を持っていることだろう(Kim & Markus, 1999)。しかし、ここで挙げた“ふつう”とは、社会的に比べられる能力や所有物といった自己の諸要素を、周囲の他者と同じ程度持っていることと認識し、持っていなければ他者と同じ程度には得ようと動機づけられ、他人と比べて違う自己の個性的な側面を否定したり隠したりすることで周囲の他者と同じように振る舞うことである。“ふつう”であることは、それによって他者との共通性を増やし、自他共に関係が悪くなる危険(例: わずかな意見の相違から集団内で広がる評判の悪さなど)を最小限にしながら集団の中で他者からの排除を未然に防ぐことに繋がる⁶。

“ふつう”の人であることは、日本文化においてポジティブな結果をもたらすのか。この点を、特に小中学生を対象に検討した大橋(2010)や、学生を対象とした佐野・黒石(2009)の研究では、小中学生は普通の人を望ましいと判断し、自分も普通でありたいと思いい、学生は自分の課題達成が並であると“落ち着く”気持ちが伴うことを示している。落ち着くという感情反応は、Higgins(1997)の義務自己を達成した感情である。義務自己の達成、すなわちこうあるべきだと社会的な規範に照らして達成すべき自己像と、現実の自己の間の乖離が少ない場合、人は周囲からの批判がないために平穏な感情経験をやる。Lee, Arker, & Gardner(2000)でもこの点は東アジア文化の特徴と指摘されており、中国では義務自己を達成した場合の感情をより強く感じる事が示されている。これらを考慮すると、“ふつう”であることは、協調的な文化的文脈で達成すべき義務自己の追求に役立つと考えられる。

他者の期待に応え、関係破壊の危険を未然に防ぐこ

⁶ 今日でこそ、教育現場では互いの個性を認め合う教育が重視されているが、上記のように“ふつう”であることは、大学生活における先生と友人の関係、就職後の上司や同僚との関係、親戚や婚姻関係といった日本人の様々な自己実現の曲がり角で必ずといってよほど必要ではないだろうか。“個性”という言葉は形態レベルで使われるようになって、行動の機能レベル、および感情のレベルでは協調性を実現する行動や考え方、感じ方が奨励されていると筆者は考えている。端的に言えば、日本人は、巷で噂されている個性的とされる服を皆で着ることで批判を回避し安心しているのではないだろうか。

とが最優先になるほど、個人の要求やニーズを満たすことは後回しになる。協調的な文化の成員は、このことを日常からよく理解しているため、例えば自分に何か困難なことが起きたとしても、集団内の他者との関係性が利害関係の天秤に乗っている場合は、自分で負担を負うような判断をしがちである。時には、明らかに他者に援助を要請すべき状況でも、自分ひとりで解決すべきではないか、他者ではなく自分に非がないかを精査し、関係性を乱す可能性が少しでもある場合は他者に助けを求めない。関係懸念 (relational concern; Taylor, Sherman, Kim, Jarcho, Takagi, & Dunagan, 2004) と呼ばれるこの心理過程は、特に東アジア圏の文化に所属する者で強いことが指摘されている。Taylor et al. (2004) の研究では、“援助を求めることによって、相手が迷惑を被ることになる” “援助を求めることによって、かえって悪い結果を招く” “援助を求めることによって、相手から非難される” “援助を求めることによって、周りの人の前で自分が面子を失う” “援助を求めず、自分でやるべきである” といった項目に、アジア系が欧州系に比べて強い同意を示していた。

これを日本で代表的な援助要請場面ごとに場面想定法で追試した林 (2009) によれば、上記各項目への同意傾向と援助要請をしない傾向との間に、場面の違いを超えて相関関係が見られた。すなわち、相手の迷惑や被害者の社会的評判の悪化が不安であることが、必要な場面にもかかわらず周囲への援助要請をしない傾向と関係していた。身近な関係性からの拒絶は、しばしば社会的評判の大幅な失墜を伴うものであり、関係懸念が、仮に自らには非のない被害であっても、関係者へ被害を訴える行動を差し止めてしまう要因になっている可能性がある。いじめやハラスメントなど、すでになんらかの対人関係にある他者からの攻撃による被害の場合、被害に合うことは自分の社会的評判の悪化と密接な関わりがあって然るべきであり、まさにそれゆえに、関係懸念による援助要請抑制が働いても不思議ではない。これが正しいとすれば、被害者の社会的評判が失墜しないことを確保することが被害の申告を左右する要であるとも考えられる。

ここまで日本のいじめ、すなわち日本文化における社会的勢力の乱用を取り巻く要因として、1) 拒絶に対する敏感性、2) 日常に潜在する疎外、3) “ふつう” の重要性と、4) 関係懸念の強さについて論じた。それぞれは先行研究の研究対象や説明のために便宜的に分割したが、すべて文化的課題としての協調性にまつわる側面として互いに個人、もしくは文化のレベルで関連を持っている。つまり、日本の文化的文脈下では、“ふつう” であろうとすることで普段の人間関係からの排除を未然に防ぐことが社会的な自己実現とされ、そのために、関係性攻撃や被害の見えにくさと

いった、日本的な社会的勢力の乱用が生じていると考えられる。

最後に、これらに加えて、近年の比較文化研究から明らかになりつつある、社会的勢力と人並み感、ウェル・ビーイングの文化的あり方から、いじめに近接した文化的要因について論じる。

3. 文化と社会的勢力のあり方

社会的勢力とは、個人が、相対的な資源や罰によって影響の受け手の生活空間に変化を起こさせる程度のことである (Keltner, Kleef, Chen, & Kraus, 2008)。社会的勢力の一つの指標である社会経済階層 (Social Economic Status; SES) が、それぞれの文化的文脈でどのような行動と相関するか、近年関心が集まっている。例えば Park, Kitayama, Markus, Coe, Miyamoto, Karasawa, Curhan, Love, Kawakami, Boylan, & Ryff (2013) は、日本文化で社会的勢力を持つことの帰結として、怒りを表出すること、すなわち、怒り感情を感じた際に言語的、身体的な攻撃行動を行う (例: ドアをバタンと閉める、悪口を言う) という特徴を上げている。これまでの議論のように、関係性を重視する文化的課題があるにもかかわらず、なぜそのような文化で社会経済階層の高さが対人的葛藤に繋がる怒りの表出と関連するのか。

この説明として Park et al. (2013) は、協調的文化における社会経済階層の高さは、同時に、その文化の成員に否定的な感情表出の“特権”を与えていると考えた。実際、日本での客観的社会経済階層と怒り表出の関係は、普段の仕事でどの程度判断する権限を持つかを測定する項目 (例: 仕事の判断に、どれほど頻繁に発言権を持っているか、どの仕事をするかを選択できる機会はどれほど頻繁にあるか) によって媒介されていた。すなわち、協調的な文化における高社会経済階層者は、その地位を他者が認めることでその立場にいる。それゆえ、大多数を占める一般の階層に属する者から畏敬の念を向けられたり、従属する行動を取られることによって、怒りを表出する権限を社会的に与えられている。

これが正しいとすると、日本文化で社会的勢力を獲得することは、他者の是認を得ることが必須である。他者から、一般的には抑制することが求められる否定的感情表出すら許容される立場であると認められるためには、おそらく、他者の目から見て明確で説得力のある社会的立場の根拠を持つことが不可欠であろう。このような根拠は、世間一般の他者間で地位の根拠として認められ、共有されているものでなければならない。ここで興味深いのは、日本において健康と関連する社会経済階層は客観的社会経済階層 (e.g., 収入, 地位, 学歴など) であることが近年明らかになっている (Park et al., 2013)。これは、客観的な社会的勢力

の根拠は他者に見せやすく、他者の評判を成立させ安
い性質を持つためだと考えられる⁷。

このような文化的な社会的勢力の獲得と維持の仕方
に関する特徴は、普段の生活の過程で成員に獲得され
てきたと考えて然りである。社会的勢力獲得の発達過
程は比較文化的に検討されていないが、今仮に、形骸
として平等を強調する教育の中で、実は日本の生徒た
ちの間では教室における社会的な地位の是認を獲得す
るための競争が行われているとする。その場合、他者
より抜きん出る者を妬み引きずり下ろす様々な行動
が、一方では自己の社会的勢力を相対的に押し上げ、
もう一方では他者の是認をめぐるこの競争にあえぐ自
己を感情的に救済する道具的な行動となっていること
もあるのかもしれない。実際、日本のいじめ加害者は
教室で人気があり、リーダー的存在の者であることが
多い (Kanetsuna, 2004)。つまり、少なくとも加害者
の周囲からは、このリーダー格の者は社会的是認を得
ている可能性が高い。また、いじめの加害者が攻撃的
な行動と関連する妬みに敏感で (澤田, 2006)、これ
がシャーデンフロイデ (他者の不幸を愉しむ気持ち)
に繋がる可能性があることを踏まえると、日本のいじ
めは、その一部が上述のような隠れた競争によって維
持されている部分もあるのかもしれない。

ここで重要なのは、教室での社会的勢力をめぐる競
争は、それを獲得した者はより否定的感情表出の特権
を得て、獲得しなかった者はより否定的感情を抑制す
る規範が文化的に奨励されているかもしれないという
ことである。具体的に、前者は、いじめを取り巻く者
に是認される、あるいは傍観するという形で実質的に
否定的な感情表出の特権を与えられると考えられる。
今後、日本文化の社会的勢力のあり方を前提に、それ
が教室という発達の現場でどのように獲得・維持され
ているかを踏まえたいじめの文化的研究を行う必要も
あるだろう。

4. 文化と人並み感

日本文化は、他の国に比べて権力格差の強い文化で
ある (Hofstede, 2001)。権力格差の強い文化では、社
会全体として権力の違う人々の扱いが大きく異なっ
ている。すなわち、敬語が実践されていたり、年功序列
制度を使用していたり、組織の上司が決定権を持って
部下がそれに従うことが期待されている。権力格差自
体が社会的勢力の乱用になることは考えにくいだが、権
力格差の強い文化では、同じ権力ランクに所属する者
同士の間では他の文化よりも強く“人並み”であるこ
とが強調されるかもしれない。つまり、社会的な権力

の違いがない者同士では、違う者に対して実践する
様々な行動 (e.g., 敬語) がないために、過度に同じ
であると認識する、あるいは、同じであるべきだとい
う規範が存在するかもしれない。また、その人並みの
節度を誰かが破ることがあれば、他の文化よりも他者
から向けられる否定的な感情は強いものになるのでは
ないだろうか。

Uchida & Kitayama (2009) では、日本人学生に幸
福から連想する言葉を収集することで、幸福について
社会的に共有されている意味を分析した。そもそも
北米の同じデータに比べて日本では中性的・否定的
な意味が連想語として産出されたが、その中に“幸
せになると他者から妬まれる”という回答が見られ
た。一人だけ個人が幸せになることは自らの関係性
にとっては否定的なこと、すなわち他者からの妬み (澤
田, 2006) を買うと、日本人学生は認識しているとい
うことである。上記の議論と合わせると、自身の成功
を妬む他者とは、おそらく、年齢や出身地を共有する
教室など本来同じ権力ランクの関係性に含まれ、その
者の気分を自分が抜きん出ることですすたくないよ
うな他者である。本来同じ権力ランクに所属している
はずの自分が、他者と一緒ではなく、一人で抜きん出
ようとする場合には、他者からの強い同調圧力が予想
されて然りであろう。

こういったダイナミズムがあるがゆえに、日本人の
幸福感には一人だけで幸福になることに対する関係懸
念が伴い、これが繰り返される普段の生活の中で幸福
感自体が他者との調和を前提としたものとして共有さ
れているのかもしれない。実際、日本人の幸福感には
“人並み感”が伴い (Hitokoto & Uchida, 2014)、自分
が人並みであると認識することは日本的なウェル・
ビーイングの一部である。また、人並み感は身近な他
者との対人関係の調和の認識と、平穏無事であること
の認識と相関する。これらは、否定的な側面を挙げれ
ば、他者の評価を懸念したり、無難な手を選ぶこと、
あるいは革新的な行為の妨げに繋がるおそれがある。
しかし、社会的勢力を持つものが持たない者に対して
真に温情的で正しい判断を行い、個人が成功するため
に他者を蹴落とす必要のないシステムを整えば、安心
感と自己実現を達成することのできる、日本文化に根
付いた良い社会の状態を醸成することができるかも
しれない。教室でのいじめのみならず日本社会に存在
する社会的勢力の乱用の問題は、文化的な自己と対人関
係のあり方を活かすように社会システムを調整するこ
とで問題解決に繋がる可能性があるのではないだろ
うか。

引用文献

林 修平 (2009). 関係懸念が援助要請行動の意思決

⁷ 反対に、アメリカでは主観的社会的地位 (“自らの所属する
コミュニティでどの位置にいるか”を10段階から一つ選択した
もの) が健康と関連した。

- 定に及ぼす影響——場面想定法を用いた検討——
関西学院大学2008年度卒業論文
- Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2014). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, **16**, 211-239.
- Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences: Comparing values, behaviors, institutions, and organizations across nations*. Thousand Oaks, London, New Delhi: Sage.
- Ishii, K., Miyamoto, Y., Niedenthal, P. M., & Mayama, M. (2011). When your smile fades away: Cultural differences in sensitivity to the disappearance of smiles. *Social Psychological and Personality Science*, **2**, 516-522.
- Kanetsuna, T. (2004). Pupil insights into school bullying: A cross-national perspective between England and Japan. Unpublished PhD thesis, Goldsmiths College, University of London.
- Kanetsuna, T., Smith, P. K., & Morita, Y. (2006). Coping with bullying at school: Children's recommended strategies and attitudes to school-based interventions in England and Japan. *Aggressive Behavior*, **32**, 570-580.
- Kashima, E., & Hitokoto, H. (2009). Cultural similarities and differences in social identification in Japan and Australia. *Asian Journal of Social Psychology*, **12**, 71-81.
- Keltner, D., Kleef, V., Chen, G. A., & Kraus, M. W. (2008). A reciprocal influence model of social power: Emerging principles and lines of inquiry. *Advances in Experimental Social Psychology*, **40**, 151-192.
- Kim, H. S., & Markus, H. R. (1999). Deviance or uniqueness, harmony or conformity? A cultural analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 373-382.
- Kitayama, S., Markus, H. R., & Kurokawa, M. (2000). Culture, emotion, and well-being: good feelings in Japan and the United States. *Cognition and Emotion*, **14**, 93-124.
- Kitayama, S., Park, H., Sevincer, A. T., Karasawa, M., & Uskul, A. K. (2009). A cultural task analysis of implicit independence: Comparing north America, Western Europe, and East Asia. *Journal of Personality and Social Psychology*, **97**, 236-255.
- Lee, A., Arker, J., & Gardner, W. L. (2000). The pleasures and pains of distinct self-construals: The role of interdependence in regulatory focus. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1122-1134.
- Markus, H. R., & Conner, A. (2014). *Clash! 8 cultural conflicts that make us who we are*. NY: Hudson Street Press.
- Morling, B., Kitayama, S., & Miyamoto, Y. (2002). Cultural practices emphasize influence in the United States and adjustment in Japan. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **28**, 311-323.
- 大橋 恵 (2010). 「ふつう」の望ましさについて——小学生・中学生・大学生の比較—— 東京未来大学研究紀要, **3**, 29-36.
- Park, J., Kitayama, S., Markus, H. R., Coe, C. L., Miyamoto, Y., Karasawa, M., Curhan, K. B., Love, G. D., Kawakami, N., Boylan, J. M., & Ryff, C. D. (2013). Social status and anger expression: The cultural moderation hypothesis. *Emotion*, **13**, 1122-1131.
- Ruby, M. B., Falk, C. F., Heine, S. J., Villa, C., & Silberstein, O. (2012). Not all collectivisms are equal: Opposing preferences for ideal affect between East Asians and Mexicans. *Emotion*, **12**, 1206-1209.
- 澤田匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処——感情心理学からのアプローチ—— 新曜社
- 佐野予理子・黒石憲洋 (2009). 日本における「ふつう」の意味——自己改善動機の観点から—— 対人社会心理学研究, **9**, 63-72.
- Smith, P. K., & Sharp, S. (1994). *School bullying: Insights and perspectives*. London: Routledge.
- Takemura, K. (2014). Being different leads to being connected: On the adaptive function of uniqueness in "open" Societies. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **45**, 1579-1593.
- Taylor, S. E., Sherman, D. K., Kim, H. S., Jarcho, J., Takagi, K., & Dunagan, M. S. (2004). Culture and social support: Who seeks it and why? *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 354-362.
- Uchida, Y., & Kitayama, S. (2009). Happiness and unhappiness in East and West: Themes and variations. *Emotion*, **9**, 441-456.